

カトリック唐崎教会 2024年四旬節黙想会報告

典礼部 篠田文子

開催日時：2024年 2月 25日 (日) 10:30~14:00

指 導：パウロ酒井俊弘司教 (大阪高松大司教区補佐司教)

《スケジュール》

- 10:30 ミサ (ソ神父共同司式)
- 11:30 休憩
- 11:40 講話
- 12:20 黙想、告解
- 12:40 軽食
- 13:10 講話と質疑応答
- 14:00 お祈りと共に終了



《主日ミサ》

朗読箇所：創世記 22・1-2, 9a、10-13, 15-18

ローマ 8・31b-34

マルコ 9・2-10

説教 (祈り、神の声を聴く)

四旬節は『回心するように』との神様から私たちへの呼びかけを聴き取ることが中心となります。今聴いた3つの聖書の朗読を理解することが回心への第一歩となります。

第一朗読はアブラハムが一人息子のイサクを捧げなくてはならないという状況に追い込まれます。今日の朗読箇所では22章3節から8節までが飛んでいますが、この箇所はある意味でとても大切な箇所です。イサクとアブラハムの次の会話が書かれています。

イサク「私のお父さん、火と薪はここにありますが、焼き尽くす捧げものにする子羊はどこにいるのですか。」アブラハム「私の子よ、焼き尽くす捧げもの子羊はきっと神が備えて下さる。」

このように答えた時のアブラハムの心境はいかばかりだったことでしょう。結局、イサクを捧げなくてもよいように神様が子羊を用意して下さるのですが、この時にはまだアブラハムはイサクを捧げる心構えをしていた時の会話です。

そして神様は、自分の一人息子さえも惜しかなかったアブラハムの信仰をほめたたえるのです。私たちはこのアブラハムの信仰を聴いた時、どのように捉えたらよいのかは、第二朗読で聴くことができます。

「私たちすべてのために、その御子さえ惜しまず死に渡された方は、御子と一緒にすべてのものを私たちに賜らないはずがありませんか。」アブラハムはイサクを捧げなくてもよかった。でも神様は「この杯を避けて下さい」と言っているイエス様に対し「いやいや」と言って十字架の死に渡された。

もちろんご復活があることが判っていたとはいえ、そのご受難、ご死去を敢えて受け入れられた、父である神様と子であるイエス様。